

## II.現象学の理念

### — 厳密な学 —

フッサールが哲学 — 現象学的哲学 — の理念として「厳密な学」としての哲学を標榜したとよくいわれる。たしかに『ロゴス』誌 — これは当時の新カント派の雑誌である — の第一巻に、求められて『厳密な学としての哲学』という論文を寄稿している。それ以来、フッサールの現象学を、「厳密な学」という理念のもとに理解しているのは誤りではない。

しかし、フッサールはこの「厳密な学」というタイトルのもとで一体何を理解していたのか。それとともに、フランスの現象学の泰斗、メルロー・ポンティや、彼に先立って、オイゲン・フィンクなどという晩年のフッサールにもっとも近いところにいた助手が主張するように、晩年のフッサールが、この厳密な学としての現象学の理念を放棄したといわれている。いったい我々はフィンクのいうことを信じてよいのだろうか。そして、最晩年のフッサールは彼の壮年期のテーゼ、厳密な学としての現象学の理念を断念したと考えてよいのだろうか。

フッサールの書物や講義に親しんだ者なら直ちに気づくことだが、フッサールは常に彼の現象学の理念と方法について延々と議論し、説くことを止めない。しかるに、現象学的分析として、一たとえば知覚の分析などがあるが一積極的に高く評価しうるものは、僅かであるという印象をもつ人もいるであろう。だからもっとも皮肉な眼で見ると、フッサールの哲学の理念や方法についてのプロパガンダを傍らにおしやれば、フッサールの哲学の積極的な内実は殆どないといえることになるであろう。

フッサールへの批判の論点は、しかし、批判する側の立場を表明しているかもしれない。フィンクも、メルロー・ポンティも、彼らの自らの思索を遂行するなかで、フッサールへの「思惟する者の間での距離」を表明しているのである。この距離が、厳密な学としての哲学の理念への疑惑となる。

まず厳密学の理念の内容は、どういうものであったのかをのべ、その後で、この理念についての弟子や解釈者たちの論争に触れることにしよう。

フッサールが哲学をとくに厳密な学と考えるのは、最も根源的な第一次的明証性の直観に立ち帰り、そこから諸概念の裏付けをするからである。「概念から

いかなる判断をもひきださずむしろ言葉が当該の語によって言及している現象の中へと直観をすすめること」が重要である。「事象を問う」(Die Sachen selbst müssen wir befragen!!) ことがもとめられている。(Phänomenologie als strenge Wissenschaft, Szilasi-Ausgabe, S.26 Ffm 1966)

『厳密学』においては、現象学的な仕方で、当時の実験心理学や精密な物理学、更には、世界観学による客観化、実体化、経験主義化から主観性を救い出そうとしている。フッサールは、「精密な実験心理学」が意識を自然化し、実体化し計量化しようとするという告発し、他方で、精密な物理学を、「自然の計量化」のもとに告発しようとする。フッサールのみるところでは、これらの基礎にあるのは、「自然主義の哲学」であり、これは、理念の(つまり理想と規範の)自然化と意識の自然化にもとづいている。理念の自然化とは、アприオリな思惟法則が、事実ととりかえられ、思惟の自然法則とみなされることに他ならない。理念、価値、規範、理想を自然法則により解釈することは、理性の自然化を導くということになる。

実験心理学は、当時隆盛をみていたし、そして今日までも心理学の主潮流を形成している。心理学はフッサールでは「精密心理学」(ヴント)「精神物理学」(フェヒナー)として把握されており、フッサールの批判によると、このような心理学はすべて「純粹意識を(実在としての)自然に」変えようとするという。心理学が扱うのは経験的意識であり、心理学は「意識の自然科学」であり、これに対して、現象学は、いわば純粹な「意識」の「現象学」である。

この「厳密学としての哲学」という論文で、ふつうは、フッサールのディルタイ(Dilthey)批判 — 世界観学批判がのべられていると解釈されてきたのであるが、今日では、フッサールとディルタイとの間の文献学的研究によって(オルト: E.W.Orth)フッサールが読んだのはEbbinghausのディルタイ批判の書評のみであって、当時フッサールはディルタイを読んでおらず、1920年代に入ってディルタイをいわば再発見するに至ったということが明らかになっている。したがって、この世界観学批判の部分はできるだけDilthey批判としては軽視することにして、むしろ哲学の永遠性、厳密な学の根源的永遠性を強調して読むべきであろう。「厳密な学としての哲学」という論文でフッサールが主張したかったのは、(1)アприオリ(理念、規範、理想、思惟法則)の自然化への批判、(2)意識の自然化(物象化)への批判(とくに実験心理学)であり、これらの批判を通して世界観哲学から区別された学的哲学が(3)厳密

な「永遠の哲学」として「永遠の妥当性」（厳密学としての哲学）を追求するべきだ、とみている。

フッサールがここで敵対し論争をいどんでいるのは、精密心理学（これはまた実験心理学とも呼ばれている。精密性とは、明らかに数学的計量化という方法を指している）と、その背後にある近代の自然科学である。そして、ここに更に付け加わってくるのが、近代の世界観哲学のもとに理解され、その背後に潜む歴史的相対主義である。この点からみると、アプリアリの自然化というものも、実は、アプリアリを自然＝物に関係づけるという意味で「相対化」に他ならないし、また意識の自然化も、意識の自然科学的取り扱いという意味では、「相対化」である。したがって、この論文の中で、あらゆる相対主義を批判しようとしているとみることもできよう。このことを当時の概念で表現すれば、自然主義への批判である。「自然主義が理性（意識と理念・規範）を自然化している」ことを告発するフッサールは理性を否定する擬似理性主義者として自然主義を把握する。この自然主義のもとで実際に考えられているのは、今日の言葉でいえば「科学主義」（Szienzismus）である。「自然科学を規範としてこれに従うことは、ほとんど不可避的に意識を事物化（物象化）することを意味する」（「厳密学としての哲学」S.33）。フッサールの批判の要点を把握しておこう。ここでは、主として実験心理学に限定し、批判という否定的な側面のみをとりあげる。なぜなら肯定的な側面は、この講義の展開の中でおのずから示されるからである。

実験心理学者は、内省を排除し、偶然的な形式のもとに直接経験を扱う実験的方法を作り上げたと誇示している。しかしその彼らも実験の結果を把握し、まとめあげるときには何らかの概念を使用せねばならない。たとえ素朴な経験に与えられたものの記述にすぎないものであっても、それを解釈し、理論にまとめあげるときには、概念を使用する。フッサールの批判は、この概念の学的価値に集中する。これらの概念が、学的価値を持つことは実験心理学者から期待できない。なぜなら、彼らは一つの言葉の内在的な概念的な意味の充実をもちえないからである。一つの概念のもとでとなるものは、現象学的な本質分析、本質直観による本質の把握によるからである。例えば『論研』が概念の吟味から始められたように、フッサールは、個々の概念の本質直観による重い充実を重視する。フッサールの確信によると、「概念は、その使用可能性の権利根拠を経験から獲得する。この場合の経験は、現実の知覚や想起を引き渡すものを考

慮して考えられており、それは、記述を通して与えられるということである。」

概念を内的に価値づけ、根拠づけるということは、決して概念分析を意味するのではない。概念のスコラ的分析は、フッサールがつねにその内容の空虚さを批判していたことである。そのようなスコラ哲学的概念分析ではなく、むしろ哲学的直観、より現象学的な本質把握によって概念を厳密に明晰、判明性にもたすることができる。このような明晰判明に根拠づけられた概念により、下から築き上げられた哲学が、フッサールのいう「厳密な学としての哲学」である。

実験心理学者は、意識を取り扱い、実験の対象とする。そして、精密な方法—— 実験的方法 —— を使って、意識の研究をすると自称している。しかし、そのときに、意識、知覚、想起、視ること、聞くこと、触れることという基本概念が、どのようなものであるかを、内部から直観によって本質分析しているわけではない。だから、ここには、意識の物象化、自然化、事物化がみてとられるという。

むしろ現象学的な本質直観によって、意識やその心的存在を現象としての存在として受けとり、反省により記述的分析をし、意識とは何であるかを解明するべきであり、そのときに始めて意識という概念の内的で直観的な意味づけが、概念の価値として得られる。「直観は、本質を本質存在として把握するが、決して現存在を定立しない。したがって本質認識は、決して事実の認識ではない。」(『厳密な学としての哲学』、S.40, P.140)

本質直観について更に詳細にのべるのは、後に譲ることにしよう。さしあたり、この「厳密な学としての哲学」において語られているその特徴づけを挙げ示しておきたい。

本質直観は本質存在を把握するが、現実存在として定立するのではない。本質直観の基底もしくは出発点は、知覚であることも可能である。もちろん想像であってもかまわない。想像は、経験や現存在を把握するものではないとさしあたりいえる。だから、知覚、想起、判断の本質を観ることは、知覚の知覚、想起の知覚、判断の知覚に基底づけられ、また出発点をとるということも考えられる。しかし、「本質の把握は・・・本質の把握として直観的な把握であり、経験の働きとはまったく異なった種類の直観の働きである。」(『厳密学』S.40)  
(ここで経験という概念は、狭く、物の経験、実在の経験という意味に限定されている。たとえば「自然的な現実存在の認識」といわれている。(『厳密学』

S.57) 後期においては、直観もまた経験であるという風に経験概念が拡張される。) )

次いで理念の自然化については、フッサールはすでに懐疑的一相対主義の名のもとに、心理学主義を例にとりながら葬り去っている。たとえば、思惟法則を思惟の自然法則とみなしたり、論理的なもしくは、形式的なアプリアリを、経験的事実にもとづけて解しようとするのは、本質を事実によって根拠づけるという試みであり、馬鹿げている。妥当性や理念を示す規範的原理についての決定は経験的科学的仕事ではない。(S.52)

この論文(「厳密な学としての哲学」S.W.)の後半部において、フッサールは世界観哲学に対して、自らの学的哲学を対峙させ、両者を対決させている。すでにのべたように、世界観哲学は価値相対主義、歴史的相対主義に立っているとみなされている。

近代の意識において知覚と学問との分離が生じ、世界観を与える哲学は前者を、真理と妥当性を追求する哲学は、後者を目標とする。この目標は、生の目標の2つに対応している。我々の生の目標は、その時代の中で、我々自身の完全性と我々の同時代人に奉仕するか、それとも、私達のために、つねにあてはまる完全性を追求して、もっとも遠い世代の後世のために生きるか、である。フッサールは生の急迫に道を譲り、永遠性を犠牲にしてはならないと説く。フッサールが現象学を「永遠の哲学」(久遠の哲学: **philosophia perrenis**)にしようと考えていたのはたしかである。フッサールの言葉を引用しておこう。「強く主張されねばならないことは、我々が人類に関してもっている責任をも忘れてはならないということである。我々の急迫を鎮めようとして、時代のために永遠を犠牲にしてはならない。・・・急迫はこの場合学に由来する。そして学に由来する急迫はただ学によってのみ克服されうる。」(S.W.S.66)

世界観は抗争する。世界観哲学は、この抗争に終わりをもたらすことはできない。「ただ学だけが決定を下すことができる。」「そしてこの学の決定には永遠という刻印が打たれている。」(A.a.O)

フッサールは、このようにして、「厳密な学」であろうとする意志を哲学は決して放棄してはならないという。以上のこれまでの記述から明らかなように「厳密な学」の理念は、哲学(現象学)を精密科学(数学や数学的物理学等)から区別する。厳密性とは、明証性に基づいた概念的明晰性と判明性のことに他ならない。「深遠さは知恵に関わり、概念的な明晰性と判明性は、厳密な理論に関

わる。」(S.W.S.69) 明晰性と判明性をもった概念は、究極的には、「自証の眼」(必ずしも自分の目でみるということではないが) でみることにもとづく。哲学は、根源的な学であり、その根源性は、「直接的直観」つまり現象学的本質把握にもとづいている。

現象学の徹底主義 (Radikalismus) も、究極的には、我々自身の自証の眼で見ること、事象を一定の既存の何ものか (先入見、伝承、大家の大きな名前) によって眩惑されて、これを無批判に受け入れるということをしてはならないということに尽きる。しかしこのことは、いかなる意味でも、哲学者が学的な哲学をめざすときに、歴史を超えた永遠の立場に始めから立っているということではない。フッサールは、現象学者が非歴史的な立場を追求するとのべたことは一度もない。そうではなく、哲学者はやはり、歴史の中を生き動いているのであって、超歴史的な構えをとることはとうていできない。否、それどころか、哲学者は、哲学の歴史を必要とする。それは「偉大な哲学がもつ独自の精神内容によって我々が鼓舞されるため」である。つまり哲学の歴史を、その内部から、後のフランクの定式化を伴うと、志向的一史的に見る、目的論的に見るということである。哲学の歴史を目的論的にみるということがここでいわれている。「しかし我々は歴史上の哲学によって哲学者となるのではない。」我々が哲学者となるのは、問題そのものを問題自身から生ずる要求に耳を傾けることによる。哲学は、絶対的に明確な始源の学、根源の学になる。そして、そのときの始源、根源、「万物の根源」とは、直接の明証性にもとづく、直接の本質直観である。

フッサールはこの考え (哲学の理念) をのちに絶対的必然性により可能とせられた学と解する。

後世の解釈者たちの中で、(これはすでに言及しておいたことであるが) フッサールがこの「厳密な学としての哲学」の理念を放棄したのではないかという疑惑が生じ、この疑惑が問題とされる。事象的にみても、我々は今日直ちに2つの点で問題をこの理念のうちにみいだす。一つは、本質直観の強調であり、他方は、非歴史的根源の力説である。ないしは、根源が非歴史的—超歴史的であるという主張である。この両者ともに、解釈学的状況 — 歴史的状況にふさわしくない。第一の点についていえば、重要なのは直観ではなく、理解ではないかということ、更に第二の点についていえば、哲学の始源は非歴史的ではなく、「歴史に媒介されている直接性」ではないかということである。この二つ

の疑問は、フッサールのその後の発展の中で是正される論点だといえよう。本質直観という概念は、統覚 (Apperzoption) という概念に取って代わられる。統覚や統握 (Auffassung) は理解と殆どかわらない。第2の論点についていえばフッサールは発生的現象学の態度にたつてどのような研究と思索の主観的始まりも、発生してきた歴史をもち、歴史的な起源としてのギリシアの原創建からの追創設である、といわれる。現象学者の思索、明証性、本質把握、直観の起源も、実は、哲学のギリシア的創設に媒介されている。

私が描くフッサールの厳密学の理念の問題点はこれら2つである。フッサールの哲学の解釈者たちの間での論争もこの問題点に絡み合っている。しかし、それは、実際にもっと具体的な形を取っている。

フッサール自身が、今日フッセリアーナ VI 巻の中に公刊されているように、彼の研究草稿の中に次のような言葉を書き残したということが問題の発端である。引用 (Hua.VI.508) しておこう。「学としての哲学、真摯な厳密な学、実に必然的で厳密な学としての哲学 — この夢から醒めた。」(Beilage XXVIII. 508) フッセリアーナ VI の編集者である W.Biemel によると、この遺稿は1935年夏に書かれている。この遺稿の封筒にはこう書かれている。「最初の混乱した考察。諸哲学の闘争。『歴史への還帰が必要である』という省察。自己省察を目的とした歴史の『ロマン』の構築。」

フィンクとメルロー・ポンティは、これをフッサールの信仰告白からの棄教と解釈した。つまりフッサールは「厳密学としての哲学」の理念を放棄した、と。

フィンクや彼に依拠したメルロー・ポンティの解釈に対して、シュピーゲルベルクやガダマーの解釈は、真っ向から対立している。つまりこの文章は、フッサールの時代批判を表明していて、フッサールは時代への皮肉をのべているのだ、とみる。この解釈も成立することができる。というのは、この箇所(引証箇所)の続きを読むと、フッサールは次の2つの思惟方式に対峙し、対決しているから。一方では哲学を芸術作品と同じ様に考える人々がおり、彼らにとって哲学は一つの芸術の統一性のごときのものである。他方で哲学を宗教のレベルにおくという全く別の仕方でも学問(科学)と対峙させる。この両方の思潮に対して、フッサールはあくまでも「厳密学」としての哲学の理念を維持すべきであるとみている。

ガダマーは、シュピーゲルベルクとともにフッサールの時代批判と皮肉を、

このフッサールの言葉の中に読み取りながら、しかも同時に、哲学の歴史化 (Historisierung) の必要性をフッサールが認めたのだとみている。つまりガダマーの見るところでは、哲学を歴史 (つまり哲学の生起の歴史) とともに、それを一つになったところから見ることができる。

当時の歴史的状況では、哲学は非合理的な哲学になっていた。そういうところでは厳密な学としての哲学という理念は、夢になってしまっているという事実が確認できる。

ガダマーはシュピーゲルベルクに同意しながら、しかも自分の考えを哲学の歴史化 (Historisierung) として、あるいは、「歴史的な現象学 (ヘルト)」としてみるという風に論点をズラしていく。これは、フィンクの解釈を支持しながら、それをずらしていくラントグレーベの解釈と一致する。彼はもとよりこのフッサールの言葉を、必当然的な学としての哲学の理念との決別を意味するものと解釈するが、しかし、これは歴史のもしくは歴史哲学的な仕方で、省察の道を決定的に根拠づけようとするところに向かうとみる。しかしこの現象学の歴史的一歴史哲学的転回は、決してフッサールの初期の発想からの断絶なのではなく、むしろ哲学的真理を「絶対的経験」に究極的に根拠づけようとするのであって、このような彼のプログラムの必然的帰結なのである。「世界の意識として、そのつどの遂行された作用意識に不可分離的に帰属している地平意識の分析が、始めて、……この帰結への道を開いたのである。」(Landgrebe, S.187)

私には、ガダマーやラントグレーベの解釈が妥当であると思う。フッサールの厳密学の理念には原則として変化はなかった訳であり、フッサールは、厳密な学としての哲学の理念を諦めた訳ではない。しかし、それでも、永遠に奉仕する生と時間に奉仕する生との両者の間の関係をもともと対立的に考えていた訳ではなかったのであり、哲学者が、時間の生を犠牲にし、放棄して、永遠の価値に殉ずるという風に考えてもいかなかった。ただ例の「厳密な学としての哲学」という論文では、永遠性に強調があったというだけのことであった。このことをよく示すのは、インガルデン宛の 1935 年 7 月の書簡である。これは、『危機』書の Beilage におかれた研究草稿と同時期に書かれたものと思われる。『インガルデンへの手紙』(S.92/3)

フッサールの手紙の要点はほぼこういうことである。ヨーロッパの時代状況をみると、厳密学としての哲学も、スコラ哲学も過去のものになっている。そこで、超越論哲学としての哲学が「普遍学」として哲学の理念を実現するのだ、



とフッサールは確信している、云々。